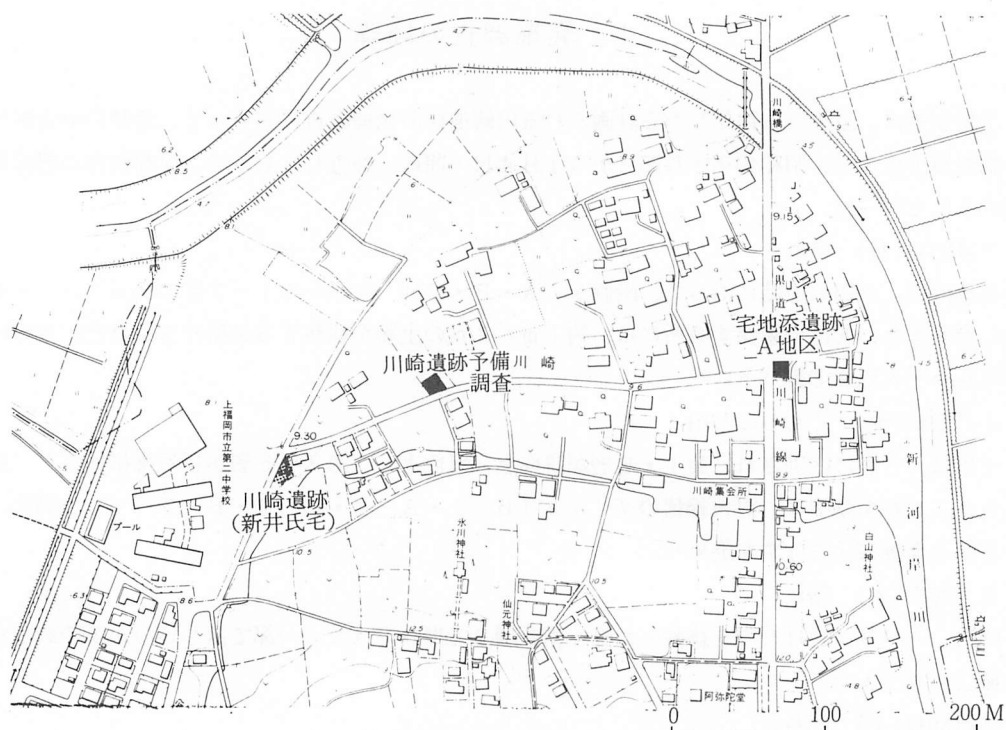


- 1.川崎遺跡 2.川崎貝塚 3.上福岡貝塚 4.川崎横穴群 5.ハケ遺跡
- 6.長宮遺跡 7.城山城跡 8.丸橋遺跡 9.松山遺跡 10.滝遺跡 11.富士見台横穴群
- 12.羽沢遺跡 13.黒貝戸遺跡 14.打越遺跡 15.水子大応寺前貝塚
- 16.大井戸跡遺跡 17.東台遺跡

第1図 遺跡位置図(1)



第2図 遺跡位置図 (1/10000) (2)



第3図 遺跡位置図 (1/5000)(3)

II 川崎遺跡の予備調査

目次

1	発掘調査の経緯	6
2	確認された遺構と遺物	8
1)	遺構	8
2)	出土遺物	10
1)	縄文土器	10
2)	石器	13
3)	古墳時代土器	14
3	まとめ	14
1)	土器	14
2)	遺構	15

(参考文献)

例言

- この報告は、昭和49年7月より5ヶ年計画で実施する予定であった川崎遺跡の予備調査として上福岡市川崎160番地に所在する遺跡の報告書である。
- 調査は、上福岡市教育委員会が主体となり、担当者として田中一郎、調査員・松尾鉄城、吉川照章、飯田充晴、中島岐視生、によって実施されたものである。
- 発掘調査期間は、昭和49年3月25日から4月4日である。
- 遺構の実測は、飯田充晴、中島岐視生、上妻洋一が行なった。
- 遺物の実測は、飯田充晴、中島岐視生が行なった。
- 発掘参加者は、以下の通りである。
荒牧澄多、新屋雅明、上福岡ジュニア文化財愛護サークル会員。
- 遺構、遺物の執筆は、飯田充晴、中島岐視生が担当した。
- 本書の編集は、上福岡市教育委員会が行なった。

1 発掘調査の経緯

予備調査は、夏季（1974年）から計画される川崎遺跡の発掘調査に先立って、遺跡の中央部北側の約84㎡の広さを、昭和49年3月25日から4月4日の間に、調査したもので、保存状況の把握を主目的として行った。

3月25日(月) 晴れ

発掘区は、南側の道路に沿って、南側からA・B・C列、東側から1～7区の2mグリットを設定した。また、北西に隣接する所には、約1m×2mの土層を観察する試掘穴を設けた。本日は、それをローム面まで掘り下げた。

3月26日(火) くもりのち雨

土層は、5層に区別され、第1・2層が耕作土（黒色土）、第3～5層が自然堆積層として据えられた。これを基準に、対角線状のグリット（B-1・A-2・C-2・B-3……）を層順に掘り下げる発掘方法で作業を進めた。

3月28日(木) 晴れ

昨日、一日降り続けた雪を排除した後、第3層まで掘り下げた。一部で落ち込みが不明瞭ながらも確認されてきた。

3月30日(土) 晴れ

A-6区の北側境より、土器を伴う焼土(第1号炉跡)、B-7区より礫を伴う焼土(第2号炉跡)が検出されたため、それらの周辺を拡張した。

3月31日(日) 晴れ

耕作が予想以上に深く達していて、落ち込みのプランが明瞭に確認できないため、発掘区全域をローム面まで掘り下げた。その結果、第1号炉跡の周辺よりピット状の落ち込み（褐色土）が数ヶ所で確認された。

4月1日(月) 晴れ

第1・2号炉跡、B-5区の第1号土壌のセクション図、平面図を作成する。A-7区、第3層中から、土師器（今回の発掘では、遺構は検出されなかった。）が出土した。

4月2日(火) 晴れ

第1号炉跡周辺のピット群を掘り下げる。なお、ピットは20を数えた。

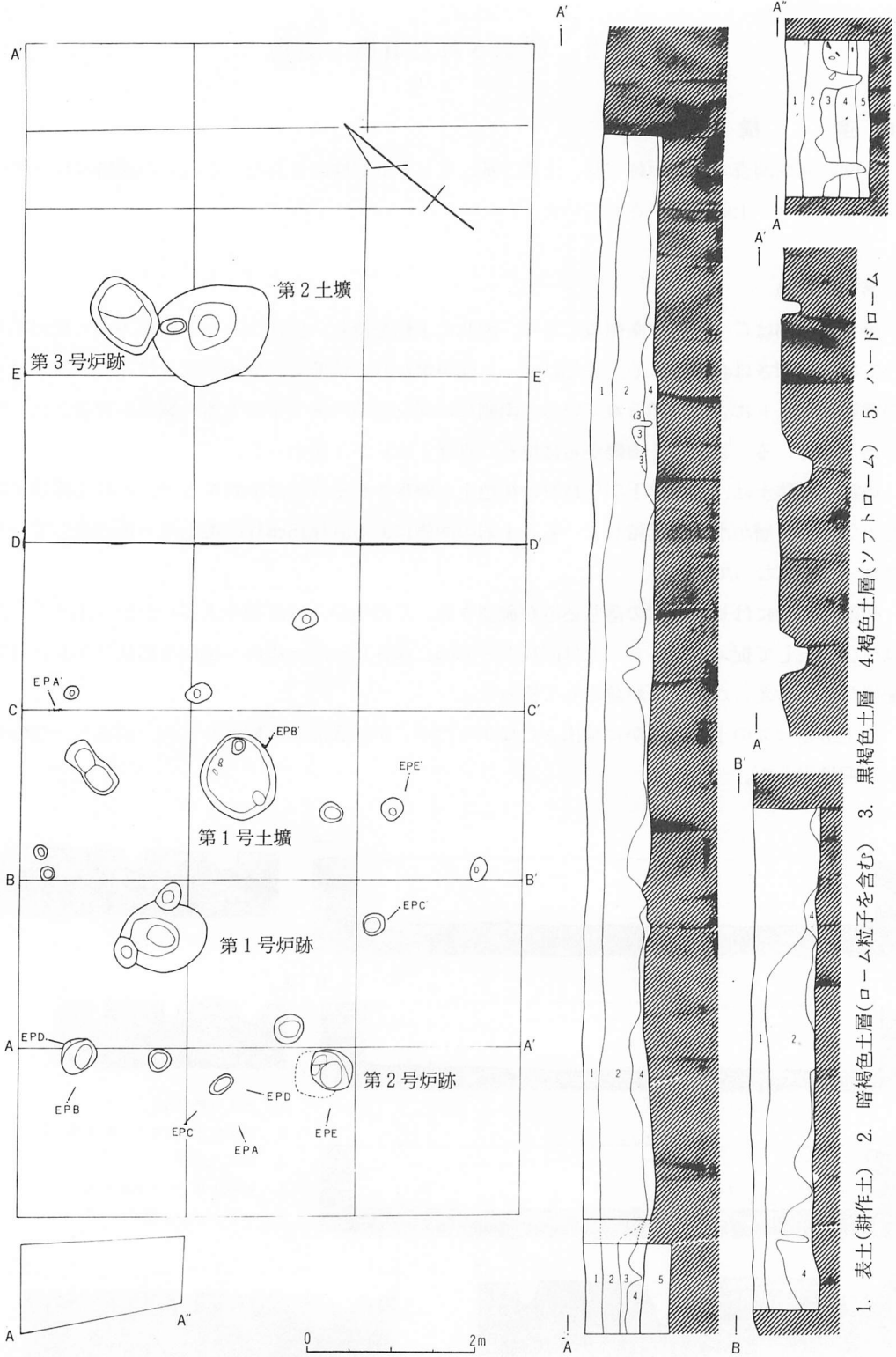
4月3日(水) 晴れ

5区より東側は全て掘り終え、平面図を作成した。5区より西側は、C-2区で炉跡（第3号炉跡）が確認された。

4月4日(木) 晴れ、風強し

第3号炉跡を図面化し、全側図の作成、写真撮影も終えた。埋戻しは、地主の了解を得て、重機で行った。これで発掘調査はすべて終了した。5日以降は、南側の道路の排水管理設工事の際に、掘られたトレンチ状の溝の南壁断面のセクション図を作成した。その結果、発掘区より南西部で、土器師を伴う住居跡や貝を伴う地下式墳などが確認された。

今回の発掘においては、当初から献身的に動いてくれた調査員の松尾鉄城氏が急病で倒れてしまったが、関係者の御努力によって、無事終了したことを、ここに記して感謝します。（中島岐視生）



第4図 川崎遺跡の予備調査遺構実測図 (1/80)(1)

2 確認された遺構と遺物

1) 遺 構

今回の発掘調査では、炉跡3基、土壙3基、ピット群が検出された。これらの遺構は耕作が深く浸透しており、上面が削平されていた。

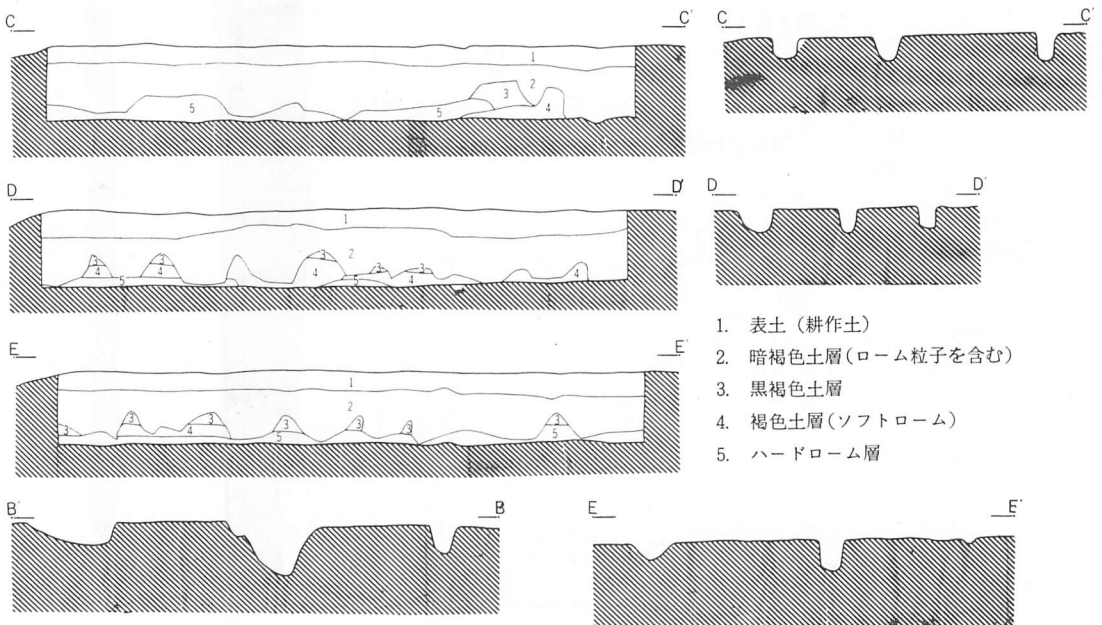
○第1号炉跡

第1号炉跡はC-6区の南側境にあり、南北に主軸を持ち、長径150cm、短径79cmの楕円形を呈している。深さは46cmである。底部はローム面が焼かれた状態で、やや平底をなしている。北と東の壁際はピットによって切られている。南側には縄文前期の縄文系の土器の胴部が埋設された状態で出土している。また、その際からは焼石(直径7cm)が1個あった。

炉跡の堆積土は、土器の下部で粘質の褐色土が観察されるほかは加熱をうけ、赤味を帯びている。焼土ブロック層が水平に堆積している。土器の南側にある直径15cm程の焼土は一番赤変していて、ブロック状になっていた。

炉跡の周囲にはピット状の落ち込みが確認され、その中からは前期の土器片が数片出土し、当初は住居跡として捉えたが、ピットは直径25~50cm、深さ15~25cm程の不定形な形状であり、柱穴の配置などを考え、ここでは炉跡として扱った。

出土遺物は先の土器のほかに検出されなかったが、炉跡底面より幅2~5cm、長さ5~10cmの礫が3個検出した。



第5図 川崎遺跡の予備調査遺構実測図 (1/80)(2)

○第2号炉跡

第2号炉跡はB-7区に位置し、直径50cm程の円形をなしている。炉跡の底部はローム面でやや赤味を帯びている。堆積土は茶褐色土を若干含む焼土である。出土遺物はなく、長さ15cm、幅10cm程の礫2個が炉跡底部より検出されたに過ぎない。焼土は上部で南側で、30cm程流れ出ているが、厚さはそれほどなかった。

○第3号炉跡

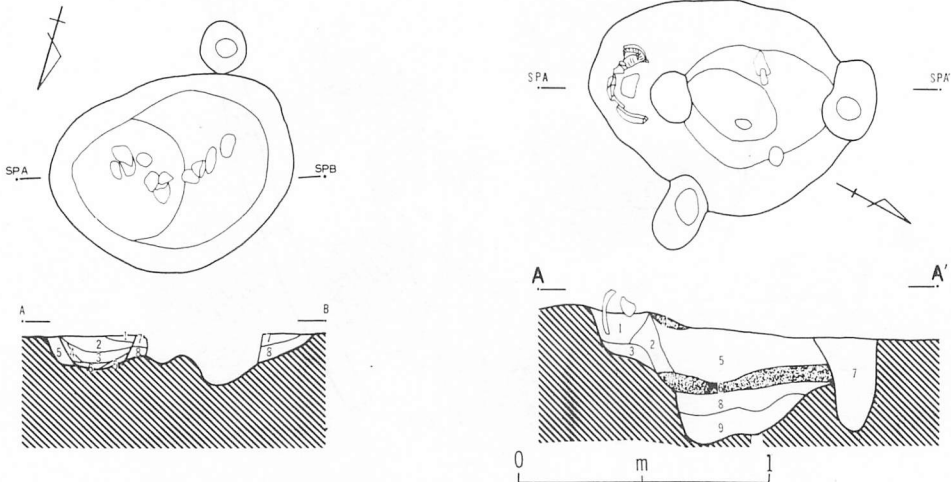
第3号はC-2区に位置し、第2号土壌を切っている。長径89cm、短径68cmの東西に主軸を持つ楕円形を呈している。堆積土は第1・2号炉跡に比べ、焼土が少なく、全体的に黄褐色土に焼土ブロック、粒子が含まれているように見られる。炭化物は殆んど見られなかった。出土遺物はない。

○第1号土壌

B-5区にあり、長径103cm、短径90cmのほぼ円形を呈している。深さは16cmで底部が平らで、東と西の壁にピットが2つ有している。東側ピットは直径15cm、深さ17cm、西側ピットは直径15cm、深さ25cmである。土壌内からは出土遺物はなく、礫が数個底部より検出された。

○第2号土壌

C-2区、B-2区にまたがる位置にあり、北側は第3号炉跡によって切られている。中央部も攪乱されている。形状は長径130cm、短径113cmの楕円形を呈している。北壁には長径30cm、短径18cmの南北に主軸を持つピットが見られる。



1. 黄褐色土層(若干の焼土粒子、ローム粒子を含む)
2. 黄褐色土層(1層よりも暗く、焼土粒子も大粒である)
3. 黒褐色土層(ローム粒子、焼土及び焼土粒子を含む)
4. 黄褐色土層(ローム粒子、焼土粒子を含む)
5. 黄褐色土層(ロームブロック粒子を含む)
6. 黒褐色土層(焼土粒子を若干含む)
7. 黄褐色土層(ローム粒子ブロックを若干含む)
8. 黄褐色土層(ロームブロック粒子を含む、7層より暗い)

1. 土器、礫含む、焼土粒子を若干含む暗褐色土層
2. ①層より明るく、焼土粒子を多く含む
3. 褐色土、粘質をおびる
4. 焼土 5. 混焼土粒子層 6. 焼土層
7. ⑤⑥層を切ったピット内土層
8. 焼土層 9. ローム(過熱を受けている)

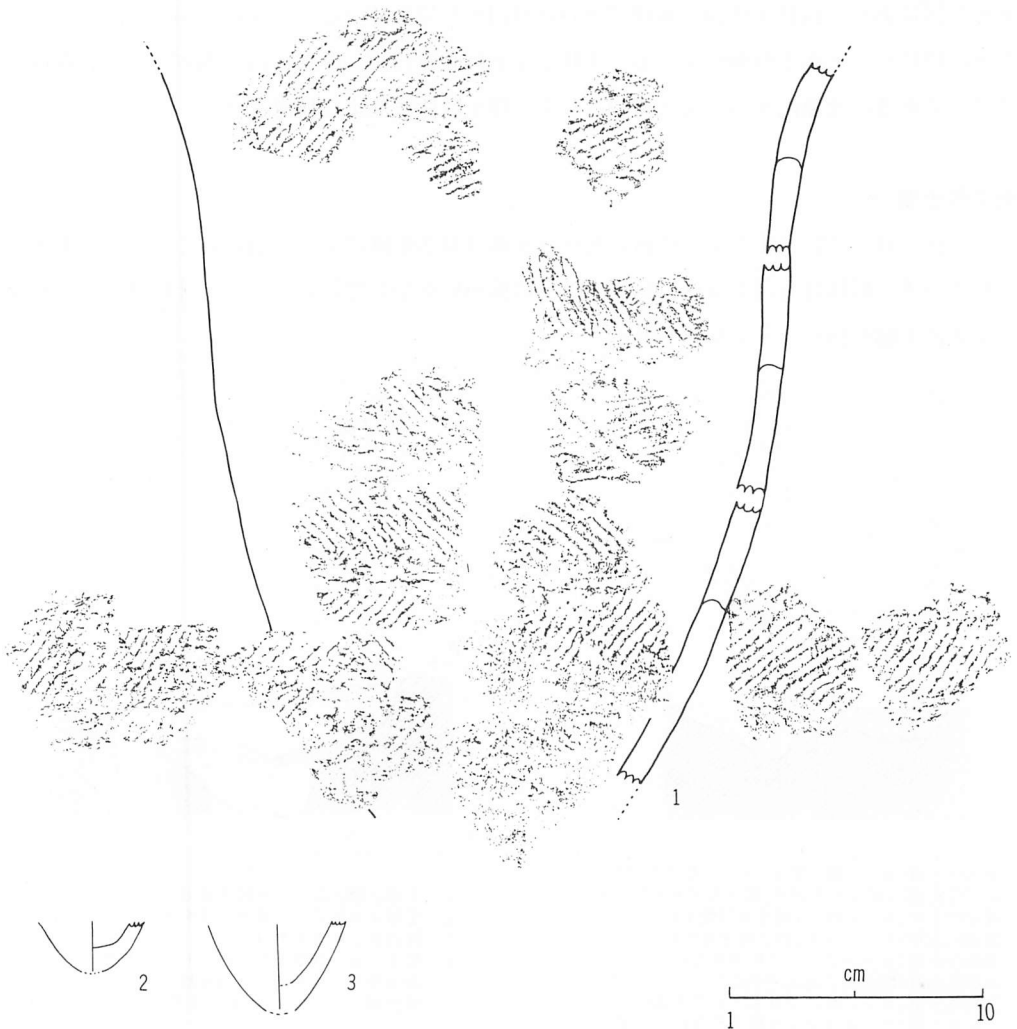
第6図 川崎遺跡予備調査第1号炉跡(右)、第3号炉跡(左)実測図(1/30)

2) 出土遺物

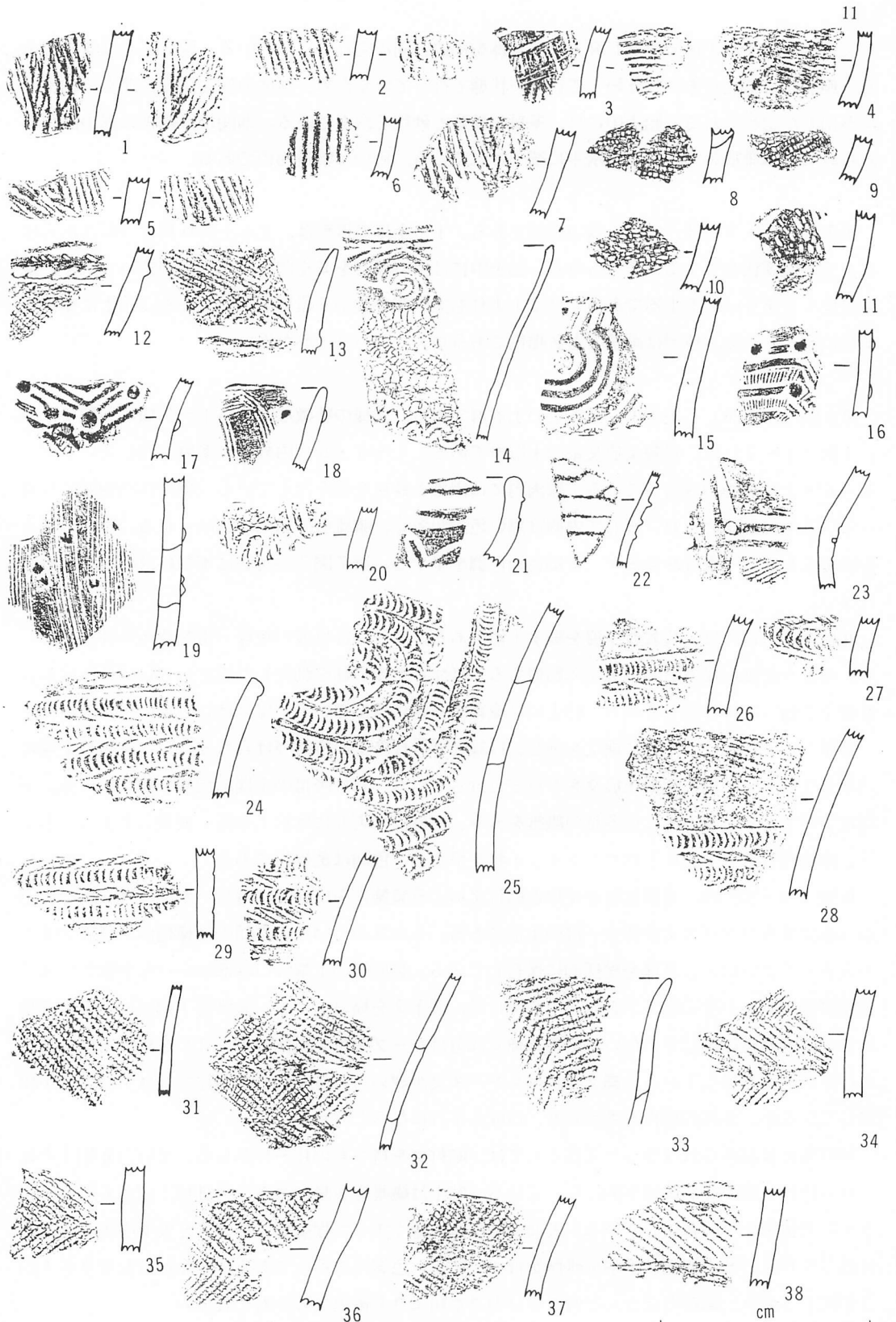
発掘調査における出土遺物は、総数約80点を数える。大半は土器であり、3点のみが石器である。ここでは器形・文様・用途が判断できる遺物約50点を図示してある。遺物の出土状況は、遺構に伴っていたのは第1図の深鉢形土器のみで、その他は表土一括と考えられる出土である。

(1) 縄文土器

第7図1の深鉢形土器は、第1炉穴からの出土で、上部の焼土帯に伴っており、埋設された状態で検出された。土器自体は不良で脆く、焼成の悪さも手つだって風化が著しい。器肌の状態・割れ口等は良好とは言えない。そのため同一個体と判明していても接合できる破片は限られ、困難なカ所が多い。第7図では一応推定復元を試みているが、口縁部と底部は欠いており、胴部だけの破片であるからして、復元図の立ち上がり具合など若干の不安がある。しかし、破片自体には僅かな湾曲が認められるので、胴部の張る深鉢形の土器ということは判断できる。



第7図 川崎遺跡予備調査出土土器拓本図 (1/3)(1)



第8图 川崎遺跡予備調査出土土器拓本图 (1/3)(2)

0 cm 10

文様は、縄文が主体で単節LR・RL原体を横位方向に交互で行っている。胴部下半は無文である。施文時は器面があまり乾燥していない状態で行っているため、原体の施文深度は深く、粘土のはみ出しが認められる。胎土中には、多量の繊維と砂粒を含んでいる。器面には繊維の露出痕が認められる。繊維痕の方向はほぼ水平に統一されている。色調は暗黄褐色である。

第7図(2・3)は、尖底土器の底部である。1の全体の器形は、立ち上がり具合の弱さから推定すると砲弾状を呈すると考えられる。胎土中には白い浮石を多く含み、黒雲母が認められる。焼きが良くしまりのある土器である。2は1よりも尖底部が尖がる器形を示している。胎土は繊維を多量に含んでいる。色調は両者とも黄褐色であるが、2の方は内面が黒い。

第8図(1~38) 表土中一括出土の土器群である。文様の特徴などから1~7類に分類できる。

I類(1~7)は、貝殻条痕文系の土器群である。1~3・5は内外面に条痕を残しているが、4・6・7は外面のみ行っている。器肉内には繊維と砂粒を多く含んでいる。繊維は内側面に片寄っているものが認められ、概して内側は黒い色調が多く、繊維痕の露出が認められる。外面は粘土を被覆した感じで繊維を含まず、黄褐色の色調を呈する。第7図2の尖底は本類に含むものかもしれない。

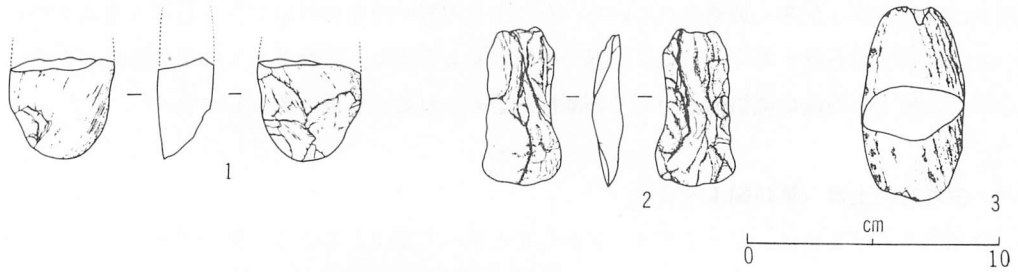
II類(8~11)は、貝殻背圧痕を施す土器である。8~10は貝殻の複縁一帯を背から押圧している。ちょうど細かな方形の刺突文に類似する。(マッチ棒の軸を刺突した感じ)。11は押圧時に貝を若干ひねっている感じである。胎土には繊維を多量に含んでいる。黒っぽい色調の土器である。

III類(12・13)は、地文に縄文を施し、口縁と平行な降帯に特徴づけられる。12は隆帯の上端に貝殻背圧痕文・下端に撚糸圧痕文をそれぞれ行っている。13は隆帯の上端に沈線を施している。下端は不明である。胎土内には多量の繊維を含み、内外面の表面には粘土を薄く被覆してある。ちょうど繊維含有部を中央にしたサンドイッチ状を呈する。色調は黄褐色である。

IV類(14~20)は、半截竹管の使用と貼付文による装飾帯を口縁部に持ち、胴部は縄文とその上から施文するコンパス文を持つ一群の土器である。そのなかで14は、本類の文様構成を代表するものと言ってよいほど、文様を総括的に保有している。装飾帯の上端は口縁部と平行な半截竹管文で装飾帯を区画し、その直下の装飾帯中心部には、蕨手文を描いている。装飾帯下端には、上端で認められる区画線は施していない。胴部の縄文部分はループを持つ原体LR・RLを横位方向に交互に行い、羽状を呈している。縄文部にはコンパス文が認められる。この土器片ではコンパス文が傾斜しているが、全周の場合を考えると、口縁と平行になると考えられる。

14以外には認められなかった文様としては、貼付文を持つもの16~18がある。又14の変形と考えられる15は、蕨手文が幾可学的になっている。貼土は繊維を多量に含み、第III類で認められたサンドイッチ状をより顕著にしている。表面の粘土は、薄く塗った程度で、ちょうど釉薬を施したように感じられる。又内側面は丁寧に研磨を行っている。色調は黒褐色である。なお19は貼付文を上から刺突しており、繊維もほとんど含まないので本類よりも後出なのかもしれない。

V類(22)は、細い隆線によって文様構成される一群である。器肉内には繊維を多く含む、色調



第9図 川崎遺跡予備調査出土石器実測図 (1/3)

は黄褐色である。

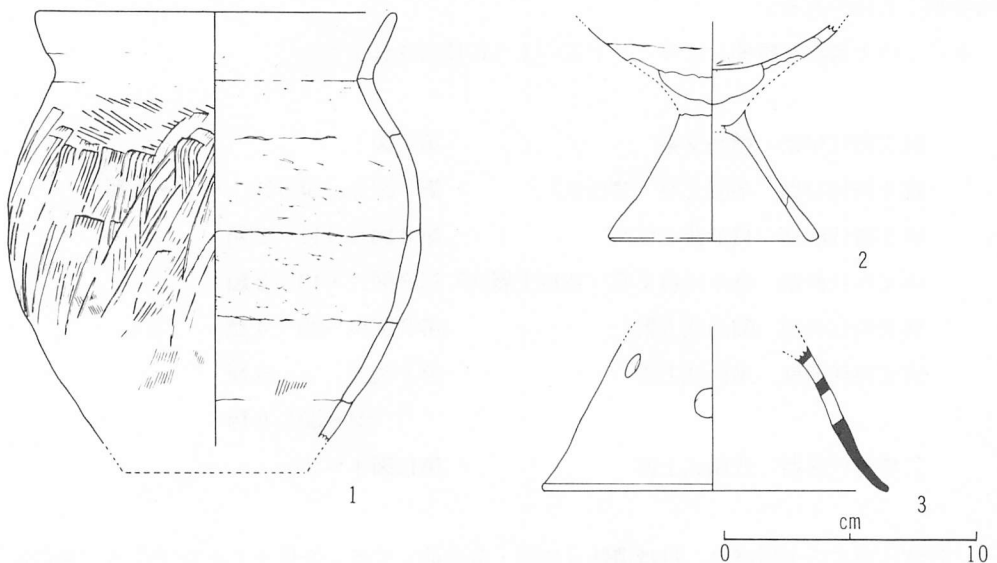
VI類 (24~28) は、半截竹管による平行沈線文を行い、その間を連続爪形文を施している。25は過巻状に描かれているが、外側には菱形の区画線が施され、その内側に形成されていると予想される。その他は、数条か平行関係を維持しながら施文されている。本類は、器面を摩く手法を用いており、特に内側は丁寧に研磨して光沢を持つほどである。文様の施文は、摩きの後、半截竹管による平行沈線、爪形文と行っている。爪形文の刺突角度は70°位である。胎土は繊維を微量に含む程度であり、砂粒の含有が多くなる。色調は赤褐色である。

XII類 (31~38) は、地文に縄文を施す一連の土器群である。横方向の施文で、撚りの異なる原体を交互に行い、羽状を呈するものが主体的である。31はLRの単節縄文のみが確認される。単節LR・RL原体を交互に行い、羽状を描くもの32~38がある。32は菱形を描く。38は無節である。胎土は繊維を多量に含み、砂粒も比較的多く含んでいる。色調は黄褐色を呈する。

(2) 石器 (第9図)

1は結晶片岩製の打製石斧である。刃部は片面一方から打撃を加え、片刃の機能の石器である。

2は粘板岩製の石器である。形状的には撥形を呈する打製石斧と考えられるが、規模的に小形で



第10図 川崎遺跡予備調査出土土器実測図 (1/3)

あり、刃部の厚さが薄く調整されている。石斧より刃器の用途に対応できる石器と考えたい。

3は砂岩製の石錘と考えられる。本器の重量は98gを測り、石錘としては多少重過ぎと考えられるが、長軸上の両端に縄掛部と思える剥離痕が認められる。石錘と把握したい。

(3) 古墳時代土器 (第10図1～3)

第10図(1～3)は、C-2グリッドからまとまって出土している。他のグリッドからは認められなかったので、このグリッドを中心としたなんらかの遺構の存在が示唆された。精査の結果は、これに伴う遺構は検出されていない。

1は最大径が胴部中央よりやや上半に位置し、僅かに肩の張る甕形土器である。胴部の器面には、刷毛目痕が残り、器面調整に刷毛目工具が多用されている。内面は、口縁部内側でヘラ摩き、胴部内側で細かなヘラ削りを行っている。又内面には接合痕が顕著に認められる。

2は、体部下半と脚部を残存する高坏形土器である。体部と脚部の接合部には、合体時に接合効力を高める凸部(ホヅ)が認められる。

3は、脚部のみを残す器台もしくは高坏形土器である。脚部には、高さが異なる穿孔が2ヶ所で認められる。器面には細かなヘラ摩きを行っている。

3 ま と め

1) 土 器

川崎遺跡予備調査で得られた土器は、前文中でも記したように、耕作土中からの出土で原位置を保っていないものが大半であった。それでもバラエティに富んだこれらの土器群は、幅の広い内容を持った遺跡と想起できるものである。今後の調査の過程で、これらを伴った遺構が発見される期待を導くものである。

ここで出土遺物を整理してみると下記のように類別されよう。

縄文時代早期	撚糸文系	第7図1
縄文時代早期	条痕文系(茅山式)	第7図2、第8図1～7・1類
縄文時代前期	貝殻背圧痕系	第8図8～11 2類
縄文時代前期	撚糸圧痕文系(花積下層式)	第8図12・13 3類
縄文時代前期	関山式土器	第8図14～20 4類
縄文時代前期	黒浜式土器	第8図22 5類
		24～30 6類
古墳時代前期	五領式土器	第10図1～3

貝殻背圧痕文の土器群は、打越遺跡(1978・荒井他)で多くを見ることができる。報告によれば、時期的な比率は早期末から前期中葉(関山式期)ぐらいの間で、花積下層期が多い。花積下層期に

伴う可能性が高い。

第8図22は、細い隆体によって文様構成される繊維土器である。あまり例を見ない土器で、平松台遺跡（1969・金井塚）に1例が求められる。黒浜式期と考えられる。又、同黒浜式期に比定される24～30は、半截竹管により平行線を描き、その間を爪形によるモチーフである。甘粕原遺跡（1978・並木隆）、ハケ上遺跡（1972・折原繁他）、八幡遺跡（1978・梅沢太久夫）、城遺跡（1970・増田逸朗）等に類例が認められる。

第8図31～38は、縄文のみの破片である。繊維の含有度・器表粘土の状態（サンドイッチ状）・縄文施文時期等から判断して、花積下層もしくは関山期の土器に共通する。

古墳時代の遺物は、甕形土器、高坏もしくは器台の合計3点である。甕形土器（第10図1）は、若干胴の張りが弱くすんなりしているが、口縁部の屈曲度・器面の刷毛目調整など五領式期の特徴を持っている。又2と3の脚部の直線的な広がり方などからもその特徴が伺えるであろう。

2) 遺 構

今回の調査で発見された遺構は、炉跡3・土壇2である。炉跡は焚火の使用が想起されるものである。1号においては、埋設土器（第6、7図）が認められ、土器から判断して黒浜期に営まれていたと考えられる。2・3号については、ここといて確たる置物はないが、焼土の状態からして1号とともに集落内で営まれた屋外炉と考えたい。

文末になってしまったが、発掘調査から早6年の月日が過ぎ去ってしまった。我々の怠慢にほかならない。執筆にあたり関係各位には色々と便宜を計ってもらい心から感謝するものである。特に三芳町教育委員会文化財係・松本富雄氏、所沢市教育委員会文化財係・並木隆氏に御教示を受けた。ここに記して感謝の意を表したい。

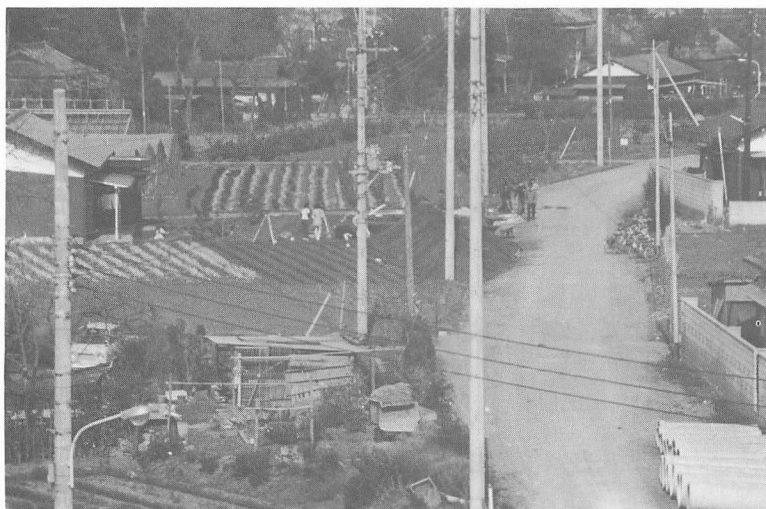
（飯田充晴、中島岐視生）

《参考文献》

- 荒井 幹夫 1978 打越遺跡 富士見市教育委員会
 市川 修 1978 川崎遺跡第3次、上福岡市教育委員会
 梅沢 太久夫 1978 八幡遺跡 都幾川村教育委員会
 折原 繁他 1972 ハケ上遺跡 文化財報告7冊、富士見市教育委員会
 金井塚 良一 1962 平松台遺跡 発掘調査の概報、埼玉県教育委員会
 田中 一郎 他 1975 川崎遺跡第1次概報、上福岡市教育委員会
 田中 一郎 他 1976 川崎遺跡第2次概報、上福岡市教育委員会
 谷井 彪 1970 内畑遺跡発掘調査報告、埼玉県遺跡調査報告第7集
 増田 逸郎 1970 城遺跡発掘調査報告、埼玉県遺跡調査報告第6集

川崎遺跡

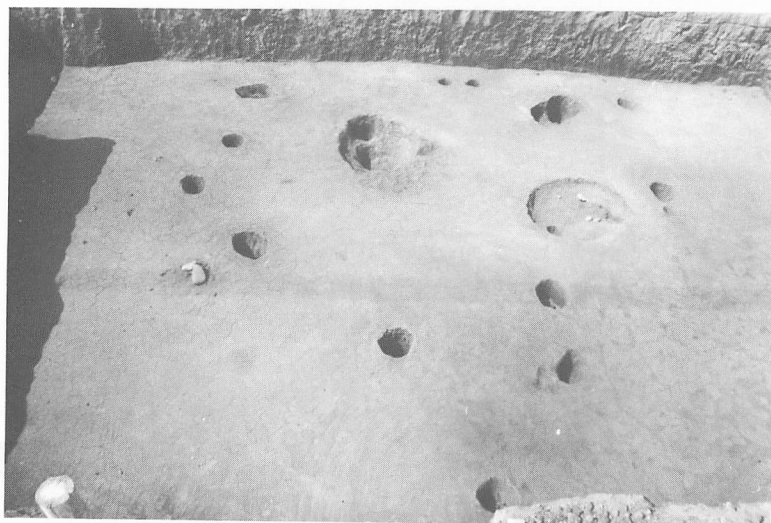
予備調査(I)



1. 遺跡近景



2. 調査風景



3. 第1号壙と
第1号炉跡
とピット群

PL 2

川崎遺跡

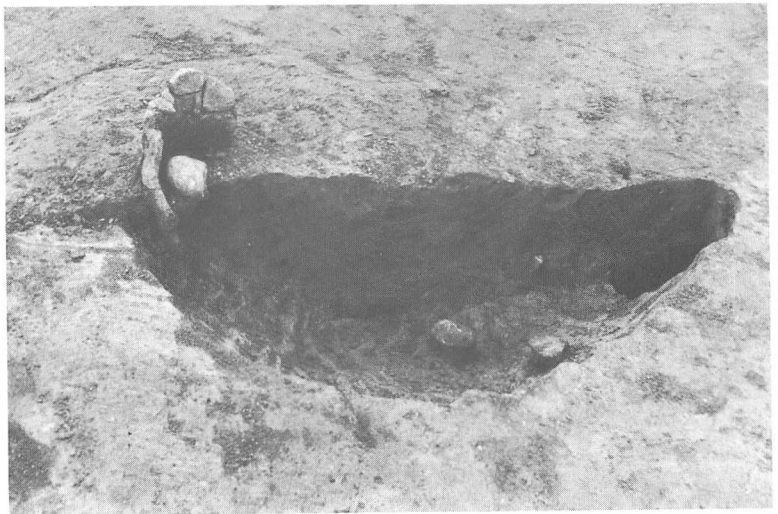
予備調査(Ⅱ)

1. 第3号炉跡と
第2号土坑



2. 第3号炉跡と
炉石

3. 第1号炉跡



帯びている。22は小波状口縁で外反の強い形態である。26、27は付加条の縄文を施す。28、29は底部である。ともに無節の縄文を施す。

川崎遺跡第3次8号住居跡（第3-64図）

壁が緩い傾斜を持って立ち上がっており、平面形は不整形である。炉址はわずかに浅く掘り込まれたもので底面に焼土層が薄く堆積していた。その西側部分1m四方の床面は堅固であった。覆土は黒褐色土とその下の褐色土からなり、黒褐色土中に褐色土に接して土器片が多く出土した（文献35）。

出土土器（第3-66図）は縄文時代前期前半の花積下層式で、胎土には多量の繊維を含有する。1～3は口縁部に捺糸圧痕を施す土器である。1、2は肥厚する折り返し状の平口縁である。3は波状口縁である。1は曲線的、2、3は直線的な捺糸圧痕を施す。

4～17は単節の縄文を施す。4～9、13、14は口縁部の破片で口唇部は尖り気味の特徴を有する。18～26は無節の縄文を施す。27～31は無節の縄文、32～54は単節の縄文を用いて羽状縄文を構成する。46は単節、無節双方の縄文を用いて羽状縄文を構成する。

42は口縁部が内傾する形態の平口縁の土器で、口縁部に隆帯を配し、縦位に突起状の貼付を加える。43は折り返し状の口縁で綾杉状の沈線文を施す。44～46は付加条の縄文を施す。47、48は貝殻背圧痕を施す。49～51は底部の破片であり、いずれも上げ底形態を有する。

川崎遺跡第14次1号住居跡（第3-67図）

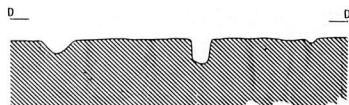
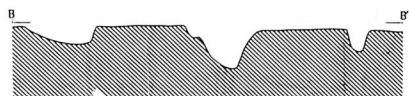
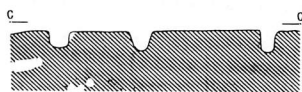
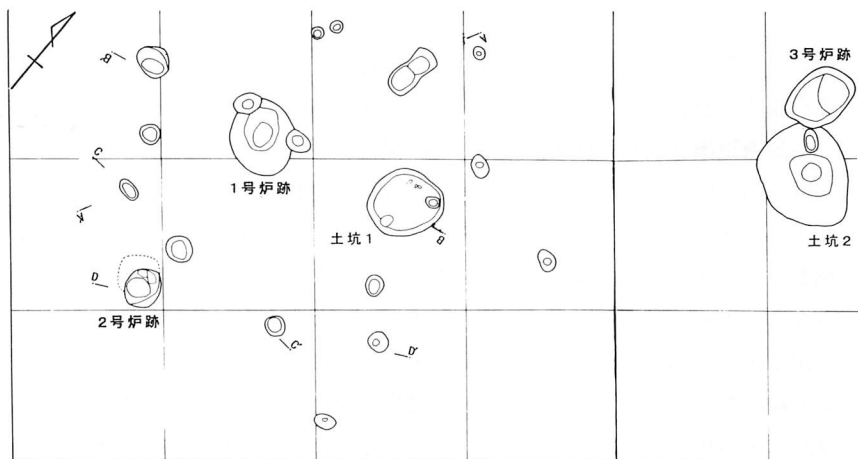
旧道路を確認し、その直下に確認したものである。周辺部分は攪乱が激しく、住居の規模は不明であるが、深さ10～15cmの壁柱穴があり、梯子状プランとなろう。北東方向に長軸をもつようで、短軸4m、長軸は6～7mになると思われるが確定できない。炉の南側に大きな攪乱がある。住居覆土中に貝層が30cm程度のブロックが数個集中していた。貝の種類はヤマトシジミやカワニナ、オオタニシ、ハマグリなどである（文献52）。

出土土器（第3-68図）は、関山式に属する。

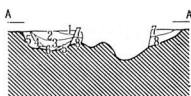
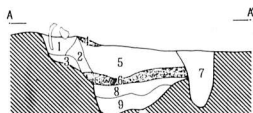
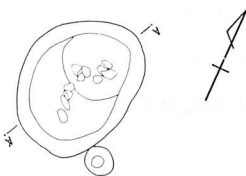
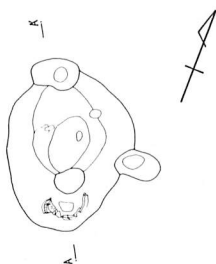
川崎遺跡予備調査（第3-69図）

予備調査(昭和49年)では、84㎡の調査区から土坑3基、ピット群、炉跡3基が見ついている。土坑1は円形、土坑2はやや不整の楕円形である。ま

II 考古



0 2m



1. 土器、礫含む、焼土粒子を若干含む暗褐色土層
2. ①層より明るく、焼土粒子を多く含む
3. 褐色土、粘質をおびる
4. 焼土 5. 凝焼土粒子層 6. 焼土層
7. ⑤⑥層を切ったピット内土層
8. 焼土層 9. ローム(過熱を受けている)

1. 黄褐色土層(若干の焼土粒子、ローム粒子を含む)
2. 黄褐色土層(1層よりも暗く、焼土粒子も大粒である)
3. 黒褐色土層(ローム粒子、焼土及び焼土粒子を含む)
4. 黄褐色土層(ローム粒子、焼土粒子を含む)
5. 黄褐色土層(ロームブロック粒子を含む)
6. 黒褐色土層(焼土粒子を若干含む)
7. 黄褐色土層(ローム粒子ブロックを若干含む)
8. 黄褐色土層(ロームブロック粒子を含む、7層より暗い)

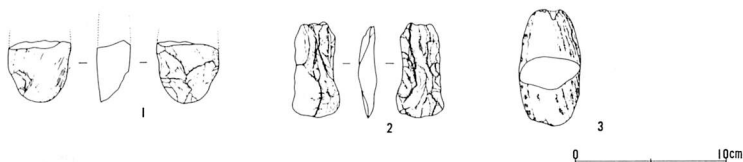
0 1m

第3-69図 川崎遺跡予備調査遺構全体図・炉跡 <1/100・1/50>



第3-70図 川崎遺跡予備調査出土土器 <1/5>

II 考 古



第3-71図 川崎遺跡予備調査出土石器〈1/5〉

たピット群は調査区南東部に分布していた。

図左下は1号炉である。楕円形をしており、柱穴に切られている。南側には縄文時代前期の土器（第3-70図1）が出土している。炉跡の覆土は加熱で赤味を帯び、焼土ブロック層が水平に堆積していた。炉の周辺にはピットが分布しており、住居跡の可能性もあったが、壁等は検出されていない。

2号炉は円形である。炉底面の礫2点が見つかったがこれ以外に出土遺物はない。図右下は3号炉である。楕円形で、焼土は少なく黄褐色土に焼土粒子、ブロックが含まれていた。出土遺物はなかった（文献40）。

出土土器（第3-70図）は早・前期に属する。1は1号炉、2～35は遺構外からの出土である。

1は緩く胴部が張る形態の土器である。単節の縄文によって羽状縄文を施す。繊維を含む。黒浜式である。2、3は尖底土器の底部である。繊維を含む。4～10は早期後半の貝殻条痕文系土器である。4～7は内外面に、8～10は外面のみに条痕を施す。11～14は縄文時代前期の貝殻背圧痕を施した土器である。15、16は花積下層式である。15は隆帯、撚糸圧痕文を施す。17～22は関山式土器である。17～21は口縁部、もしくは口縁部文様帯の部位で沈線文、貼付文を施す。23、24は細い隆線によって文様を構成する。25～29は半竹による並行沈線、連続爪形文を施す土器である。黒浜式である。30～32は羽状縄文を、33は無節の縄文を施した前期前半の土器である。34は櫛歯による条線を施す。諸磯c式である。35は沈線文、縄文を施す。

出土石器（第3-71図）として、1は結晶片岩製の片刃の打製石斧（残欠）、2は粘板岩製の撥形ぼちの小型打製石斧である。3は上端に縄掛け用の切目がある砂岩製の石錘である。

川崎遺跡第4次1号住居跡（第3-73図）

平面形は隅の丸い長方形である。柱穴は30以上が確認されている。炉址を